

「愛と心のネットワークづくり」

「こんにちは！知事です」知事講話

平成17年7月20日（水）

宇和島地方局大会議室

皆さん、おはようございます。今年度の「こんにちは！知事です」を開催いたしましたところ、御出席をいただきまして、ありがとうございました。

この事業は、私が知事に就任した時に、県民の皆様方から直接お話を伺う機会を持ちたいと思い始めたもので、各地方局で年1回開催しており、この6年間で延べ30回、約600人近くもの方々からさまざまな御意見を伺って参りました。

今日は、最初に30分程度、「愛と心のネットワークづくり」についてお話をさせていただいて、その後、意見交換に入りたいと思います。

さて、第二期県政のスローガンに掲げております「愛と心のネットワークづくり」は、県民がお互いに助け合い支え合っていく理想の社会をつくりたいという思いを基本にしてありますが、これを提唱するに当たっては、いくつかの動機があります。

一つは、国、地方を通じた厳しい財政状況でございます。現在、国は五百数十兆円に及ぶ国債残高を抱え、また、県、市町村にも約200兆円の借金があり、本年度末には、多分、国、地方を合わせて800兆円近くの債務が累積するものと見込まれております。この債務の多くは、かつての右肩上がりの時代に、さまざまな事業を進めたことや、バブル崩壊以後、景気浮揚を図るために大型の公共事業を実施したことに起因しています。また、最近では、景気低迷で税収が落ち込んでいる一方で、いわゆる医療、年金、介護、福祉とい

った社会保障経費が、毎年、国で1兆円、そして国とほぼ同額の歳出を義務付けられている県と市町村でも合わせて1兆円で、合計2兆円近くずつ経費が増加しており、それを賄うため、更に借金をしているというのが現状です。国は、今年も35兆円という大きな借金をしておりますが、そのうち、公共事業関係は5兆円程度であり、残り30兆円のほとんどは社会保障を中心とした経常的な経費を賄うための赤字国債であります。こうした中、国はプライマリーバランスに留意して、借金の返済額を上回らない範囲で借金をしていこうとしています。しかしながら、35兆円は今年新たに発行する国債により増えた借金で、実は、今年、返済しないといけない借金はほかにも約90兆円あり、この借金を返すために、別に約90兆円の借金をするという、自転車操業をしているのです。つまり、今までの借金に加えて、更に35兆円の借金が増えており、国の財政状況は破綻寸前になっているのです。

確かに、私たち国民の意識の中には、今まで、社会保障などの面で国や自治体の行政サービスに依存してきた傾向があることは否めない事実だと思えます。

端的な例を申し上げますと、平成12年に介護保険制度がスタートした時、日本国民は、皆こぞって大歓迎しました。なぜなら、それまでは、認知症の、あるいは、障害のあるお年寄りを家で抱えて、家族がその介護に全エネルギーを費やすような状態で大変な思いをしておりましたが、この介護保険制度で要介護の認定を受ければ、施設に預かってもらえる。あるいは、自宅にいても、ホームヘルパーが派遣されて、入浴その他のさまざまなサービスが受けられるようになったのです。自己負担はわずか1割で、残り9割は保険で賄われるのですから、すばらしい制度であることは事実です。ところが、保険という名前を使ってはいますが、保険会社の損害保険とは性格が全然違い、介護給付費のうち5割は税金で賄われています。25%が国の税金、12.5%が県の税金、12.5%が市町村の

税金ということです。では、残り50%が純粋な保険かという違いがあります。そのうちの16%が40歳から64歳までの働き盛りのサラリーマンの掛け金で、そのサラリーマンを雇用している企業が同率の16%を負担しています。つまり、以上合わせて82%は税金とサラリーマン並びにサラリーマンを雇用する企業が拠出したお金で、残りの18%が、65歳以上のお年寄りが支払っている介護保険料なのです。

また、愛媛県の介護給付に要する基本費用の例で言いますと、介護保険制度がスタートした平成12年には、530億円でしたが、翌年は、600億に、その翌年には700億、更に翌々年には800億と、毎年およそ100億円ずつ増えていきました。でも、それに見合うだけの歳入がありませんから、結局は借金をするか、国からの仕送りを受けるかのいずれかの方法でしか賄ってこれなかったというのが実態で、歳入がないのに歳出だけは増加するという悪循環を繰り返しているのです。もちろん、今まで、100%家庭で世話をしていたのが、制度ができたため、今度は100%介護保険に依存して、家庭の労力が減るなど、制度としてはすばらしいのですが、その財源は税金であり、サラリーマンの負担であり、企業の負担なのです。こうして、国民自らが財政破綻を招いたとの疑いもなくはないという感じがしています。

こうした介護サービスを担う割合が、かつては、家庭が100で、公的部門がゼロだったとすれば、今は、家庭がゼロで公的部門が100となっておりますが、私は、その中間点があるんじゃないのかと思っております。すなわち、可能な限り自分たち、あるいは地域で面倒を見て、足りないところは介護保険に依存するというようなバランスの取れた社会にしていく必要があると思います。このことは、医療保険や年金など、あらゆる福祉の分野で言えることで、こうした方法で、経費負担の増加を少しは抑えることができるのではないかというのが、「愛と心のネットワークづくり」を提唱した動機の一つでありました。

もう一つの動機は、ボランティアに関してであります。御承知のように欧米諸国ではかなり古くからボランティアという考え方がありました。日本で根付きはじめたのは、ちょうど10年前の阪神・淡路大震災の時です。全国各地から、若者を中心にたくさんの人たちが、災害復旧の応援に馳せ参じました。また、その翌々年、今度は福井県沖でロシアのタンカーから重油が流出する事故が発生した時に、若い人たちが全国から駆けつけて、何箇月もの間、越前海岸の黒ずんだ重油を除去して、海岸をきれいにしようという活動が展開されました。私はその光景を見て、日本人にも決してボランティア精神がないわけではなく、これまでは、きっかけとかチャンスがなかったからにすぎないのではないのか、何かあれば、自分も役に立とうという気持ちは持っているんだなと感じました。

それから、4年前にアメリカ・シアトルの老人施設を見学させていただいた時のことです。朝、見学に行くと、駐車場には車が数十台停まっています。なぜこんなに車が多いのかと思って尋ねたら、サラリーマンが朝、1時間早く家を出て、その老人施設に寄って、お年寄りのおむつの交換や食事の介助をしてから会社に出勤しているというのです。また夕方には、仕事が終わって家に帰る前に老人施設へ立ち寄って、夕食の介助やその他のサービスを提供してから自宅へと帰る、ということで、言うなれば、地域全体がその施設を支えているのです。日本の場合の福祉施設は、御承知のように、国が2分の1、県が4分の1、市が4分の1という割合で補助金を支出して整備された建物に、看護師や理学療法士などさまざまな資格を持ったスタッフをそろえて運営されています。その運営費についても、ほとんどが介護保険から賄われる形で成り立っておりますが、アメリカの場合はそういった制度がありませんから、施設で面倒を見てもらう経費は受益者の負担になります。そこで、この受益者負担の金額を抑えるために、職員数を少なくして、地域のボランティアの方々に支えてもらっているのです。

例えば、見学した施設の中に理髪室があったので「理髪室もあって、立派ですね。」と申しましたら、地域の散髪屋さんがお休みの日にやってきて、無償で散髪をしてくれているとのことでした。また、粘土細工を行うための部屋もありましたが、これも地域のボランティアが毎週曜日を決めてここに来て面倒を見てくれている。歌の指導も同様に、いろいろな形で地域全体が無償で奉仕して、施設の運営を助けているのです。そういう姿を見てすばらしいなと思った記憶があります。自分たちが余力として持っているエネルギーと時間を100%、趣味など自分の活動だけにつぎ込むのではなく、その半分でも、3分の1でもいいから、誰かのために、地域社会のために費やして奉仕をするという気持ちが多くの人たちに根付けば、すばらしい社会が出来るのではないかと考えたのです。

また、私自身のことになりますが、妻が子育てを終わって余力ができて、これから先の自分の人生を、どのように過ごしたらいいかと考えていた時のことです。「高齢化社会だから、老人施設のボランティアをやってみたらどうか。」という私の勧めに同意して、彼女は老人のデイケアサービスにボランティアとして通うようになりましたが、それによって彼女の人生観が変わりました。それまで、彼女は自分は家事と育児しかできないと思っていたけれど、それ以外でも世の中に役立つことがわかった、自分でも手助けができ、他人に喜んでもらえる、サービスの結果として、職員はもちろん、相手のお年寄りから笑顔ももらえる、こんなうれしいことはない、と彼女は感じたそうです。そして、彼女は非常に生き生きとしてきました。家庭でもデイケアサービスでの話が中心になりました。そのとき、ボランティアは社会に役立つだけじゃなくて、自分を高めることにもなり、新しい喜びを見出すことができるものなのだと、認識を新たにするとともに、人生を変えるものなのだと実感いたしました。

さて、介護の分野だけの例を申し上げましたが、子育ての分野でも同様に、ボランティ

アの力が発揮できると思います。今、私の娘たちの子育ての様子を見ておりますと、小さい子どもを抱えて働くのは、本当に大変なことだと思います。子どもが、ちょっと熱を出せば、保育園から呼び出しがかかって、仕事を途中でやめて引き取りに行かなければいけない。これが、おたふく風邪とか、はしかなどの、治療、回復に一定期間を要する病気にかかれば、預かってくれる所がないので、夫か妻のどちらかが会社を休まなければならない。今、少子高齢化と言われておりますけれども、こんな状況では、子どもを産んで育てようとする人が少なくなるのも当然だと思いました。そして、このような環境を改善するには、子育てと仕事が両立できるような社会の仕組みを作らなければいけないという思いを持って、私は今、仕事をさせていただいております。

16年前、スウェーデンに参りました時、首都ストックホルムの市議会では議員の60%近くの方が女性で、男性は40数%という構成、スウェーデンの国会でも議員全体では男性の方が多いのですが、それでも女性が40数%はおられる、と伺いました。こうしたことができているのは、なぜだろうかと思って、いろいろと勉強してみましたところ、スウェーデンでは女性が仕事をし、子育てをしながらでも、政治活動や社会活動ができるという背景があったのでした。誰かが困った時には、誰かが助けるという仕組みがきちんと出来ているのです。今、日本でも男女共同参画社会の実現という立派なスローガンを掲げておりますが、単に法律を作ったり、条例を作ったり、あるいは、計画を作っても、これらは言うなれば、お経であり、祝詞であり、バイブルであって、立派に書かれてはいますが、それだけでなく皆が助け合うような社会づくりをしないと、実際には女性の社会進出が進まないだろうと感じています。

戦前の日本は大家族主義で、曾じいさん、曾ばあさん、おじいさん、おばあさんが居て、お父さん、お母さん、子どもが居るといような4世帯同居で、何十人という大家族主義

でした。ですから、お年寄りが寝たきりになれば、その家族の中で皆が交代で面倒をみていました。また、赤ん坊が産まれると、家族全員が、それぞれ役割分担をしながら自分の出来る範囲で互いに助け合い、その子どものケアをしていました。ところが、核家族社会になって、そういう古き良き伝統が消えてしまいました。それなら、その仕組みをもう1回考え直すべきではないのか。また、何でも「行政がやってくれ。市町村がやってくれ。県がやってくれ。国がやってくれ。」というのが、今の現状ですが、気持ちの持ち方を変えて、県内の困った人、それがお年寄りであれ、障害のある人であれ、小さい子どもであれ、その人を、皆が自分の家族と考えれば、すばらしい古き良き伝統がよみがえるのではないのかとも感じております。そして「愛と心のネットワーク」により、困っている人、助けを求めている人と、自分でエネルギーと時間を若干自由にできる人とを結びつけることが、行政の仕事ではないのか、そういう仕組みに変われば、必ずいい社会になるはずだと私は思っています。

知事になって、こういった考えを基にスタートさせたのが「愛ロード」、「愛リバー」、「愛ビーチ」制度です。県が管理している道路や河川、あるいは港湾、海岸を一定の期間、責任を持って引き受けていただき、きれいにしてもらおうと募集しました。初めはどの程度参加してもらえるのか心配でした。しかし、現時点では、189団体、約1万5,000人の方々に、この活動に従事していただいております。本県の人口は150万人弱ですから、県民の1%に当たる方々が、社会を良くしようと名乗りをあげて活動していただいていることになります。きっかけとチャンスさえあれば、こういった活動に参加していただける方が結構いらっしゃるのだなと思いました。中でも、特にうれしかったのは、若い人たちや会社のスタッフだけでなく、地域の老人クラブの方々が、「自分たちでここからここまで川をきれいにしましょう」と言って、名乗りをあげてくださったことです。この

ことから、若い人がお年寄りを助けるだけでなく、お年寄りがお年寄りを支え合い助け合うシステムの確立も不可能ではないと思っております。

話を元にもどしますと、今はお年寄りの世帯で必要とされる介護などの多くの経費は、借金して賄い、子どもや孫へと付け回しをする構造になっています。道路とか、学校の建物は借金で整備しても、その後何十年もの間、形が残って、子どもや孫が使う、受益するという面がありますから、道理として、多くの国民も納得できると思います。しかしながら、社会保障については、今生きているお年寄りにかかった経費を、これから生まれてくる子どもや孫に将来払ってくださいますかと言うようなことであり、これで果たして国民に納得してもらえるのか。孫たちがそこで勉強する学校や、その上を走るような道路であれば、ツケを回すことも理屈の上では認められるだろうけれども、生前、おじいさんの治療にかかった経費を、そのおじいさんが亡くなってから後に生まれてきた孫が、どうして返済しなければいけないのか。これは、道理として通用しないだろうなと思います。現役世帯で困ったことがある場合は、現役世帯でカバーし合わないといけないのです。そういうことも含めて「愛と心のネットワークづくり」を提唱させていただいているのです。

その取り組みの一つが、サマーボランティアキャンペーンでございます。7月16日から9月30日までの間、県内で、こんなボランティアが必要とされていますよ、とお知らせするリストをつくりました。この目的は、ちょうど、学生や生徒の皆さんにとっては、夏休み期間中ですので、自分たちで協力できるものがあれば、どれにでも可能な限り参加してくださいと呼びかけて、若い人たちの間にボランティア参加の気運を盛り上げたいということでした。

それから、「愛と心のネットワークづくり」の具体的なモデルとして、別紙のとおり、10項目を示しております。

まず、「地域通貨」ですが、これは、ボランティア活動に参加したらポイントが得られる仕組みで、このポイントは、蓄えてもらうのが一番いいのですが、何らかのサービスを提供してもらったときに使うこともできます。それから、2番目の「高齢者支援」、3番目の「子育て支援」は、今申し上げました。4番目の「障害者支援」も、障害者の方々が家の中に閉じこもっているのではなくて、ボランティアの方にちょっとした手助けをしていただければ、一般社会の中で、障害のある人も健常な人と一緒に暮らせるという趣旨であります。5番目が「被害者支援」。これは家庭内暴力もありますし、あるいは、子どもの虐待の問題等もあります。次の「農村支援」ですが、これは、今まだ、農村地域には残っている所もあると思います。農繁期、田植えの時、稲刈りの時、村中、皆総出で、集落ごとにお互いに助け合う、この古き良き伝統は、まだ残っているのではないかと思います。それから、「商店街振興」があります。スーパーなどの大型店舗の普及によってさびれた商店街を活性化するためにはどうしたら良いか、空き店舗を使って人が集まることのできるような取り組みを、若い人たちに進めてもらえないか、というものであります。8番目の「河川美化活動」はさきほど申し上げました。県では、もう既に実施しておりますが、市町でも同様の取り組みは可能であろうと思います。自分たちのまちの道路や川、海岸は自分たちのものだから、自分たちが管理しようという気持ちさえ持ってくれていればよく、特にボランティアとは自覚していなくても、ゴミを一つ拾ったならば、立派なボランティア活動だと私は思います。

先年、ロータリークラブの大会がありました時に、大変すばらしい詩に出会いました。京都府の福知山市にあるお寺の住職さんが作られた「自覚」という詩です。「自分だけと思ってゴミを捨てる。地球上に1億余りのゴミが積もる。自分だけでもと思ってゴミを拾う。地球上から1億余りのゴミが消える。」

世の中には、環境を汚す人、悪くする人が必ずいるのです。でもそれをカバーする人がいて、世の中は成り立つ。ゴミを捨てる人、ポイ捨ての人がいれば、それをだまって拾う人がいる。それで社会がきれいな状態に戻る。これも一種のボランティア活動だと思います。

それから、次が「自主防災組織」。昨年、台風で東予地区が大変な被害を受けました。大変うれしかったことは、その時に、多数の県庁の職員がボランティア活動に参加していたことでした。災害が起こった場合でも、「消防団、何とかしてください。水防団、何とかしてください。」と言うだけでなく、自分たちでまず自衛力を発揮できないものでしょうか。戦争中は、皆、消火訓練を行いました。焼夷弾が落ちて家が燃えることを想定して、町内会総出でバケツリレーをやりました。それと考え方は同じで、事故や災害が起きて何か困っている人がいれば、地域の皆がそれを協力して助ける。消防団や自衛隊だけでは限界がありますから、住民の方々が地域の一員として、防災組織を作ってもらえないかという提案でもあります。最後の「まちづくり公園管理」は、さきほどのゴミ拾いにも通じます。

以上のような事柄を具体的に提案しておりますが、専門的な技術は必要ありません。介護の場合、ヘルパーの資格があればいいのですが、そうでなくても役に立つケースがあります。それは、例えば、認知症の老人の方が一方的にしゃべるのを、ただ隣に座って、あるいは、面と向かって黙って話を聞いてあげるだけでも、それでお年寄りのストレスが解消されるなら、それも立派なボランティアだと思います。

こうしたボランティアは、自分の能力や、技術力に応じて、あるいは、自分が持つてる時間、エネルギーに応じて取り組めばよく、無理をしたら長続きしません。「自分の時間のうち、70%は趣味に使いたい。でも、残りの30%は人のためにも使っている。」そういう気持ちさえあれば、いつまでも永続的にできると私は思います。そのような形でお互い

に助け合い支え合う社会を、強制ではなくて、皆さんの意識の盛り上がりによって作り上げ、愛媛県はいい所だなという全国からの評価を受けることができたらありがたいと思っています。

もとより、みかん、養殖マダイ、タオルなど、愛媛県が誇るものはたくさんあります。でも、私が本当に日本一になってほしいのは、「皆が助け合っているすばらしい社会」という評価です。この評価で愛媛県が日本一になれば、経済力で日本一でなくても、精神的にはるかにすばらしいことではないのかと思っています。そういう思いで、今、「愛と心のネットワークづくり」を提唱させていただいています。若い人を中心に、ボランティアをすることで喜びを感じる自分自身の再発見をしてもらいたいと願っているところであります。